

広報すぎなみ

Suginami



支えあい共につくる  
安全で活力あるみどりの住宅都市 杉並

{ 11/15 }  
令和2年(2020年)  
No.2290

今<sup>た</sup>佇むトンネルの  
先にあるものは。

深く、そして鋭く人の心を描き出し、  
数々のヒット作・受賞作を生み出して  
きた作家の角田光代さん。このコロナ  
禍で、不安な思いを抱えながら書くこ  
とに向き合ってきたと話します。今ま  
でのこと、そしてこれからのこと。杉  
並に長くお住まいの角田さんも長年通  
い続けたという、中央図書館で、そん  
なお話を伺いました。

特集



すぎなみピト

角田  
光代



Contents — 主な記事 —

6 | みんなで築こう 人権の世紀 7 | 2年度健康づくり表彰 受賞事業所・団体が決定しました 16 | <sup>ひろ</sup>拡げて つないで 安全・安心のまちへ

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 | ☎ 3312-2111(代表) FAX 3312-9911(広報課直通) | 🌐 区ホームページ: <https://www.city.suginami.tokyo.jp/> | 📄 発行: 杉並区 | 📝 編集: 広報課



お知らせ

新型コロナウイルスの感染状況によっては、本紙掲載の催し等が中止になる場合があります。

広報すぎなみは月2回(1・15日)発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。



プロフィール：角田光代（かくた・みつよ） 昭和42年神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。平成2年「幸福な遊戯」で海燕新入文学賞を受賞し、デビュー。「対岸の彼女」での直木賞をはじめ、「空中庭園」（婦人公論文芸賞）、「ロック母」（川端康成文学賞）、「八日目の蟬」（中央公論文芸賞）、「紙の月」（柴田錬三郎賞）ほか受賞多数。映像化された作品も多い。5年の歳月をかけて「源氏物語」の現代語訳にも取り組んだ。現在、読売新聞にて最新作「タラント」を連載中。西荻窪在住。



# トンネルにいる中でも、楽しいことはあるよ と信じて。

## 心がざわつき、四苦八苦したコロナ禍の春

### —春から続くコロナ禍。少しずつ暮らしは落ち着いてきましたか？

そうですね。夏ごろからポツポツと、キャンセルになっていた仕事や友人との食事が復活してきました。相変わらず「これから先どうになってしまうのだろう」という不安は大きいですが、それでも以前よりは少し、呼吸しやすくなってきたかな。そんな状態です。

### —お仕事にはどのような影響がありましたか？

今年の2月、5年かけて現代語訳に取り組んだ「源氏物語」が完成し、トークイベントや取材、海外でのプロモーションなどが先まで入っていたのですが、春の時点でいったん全てがキャンセルとなりました。そんな状況をどう捉えているのか分からず困惑する一方で、書く仕事は5年ぶりにオリジナル小説を書くことが決まっていながら、なかなか筆が進まず。プランクが長く、書き方を忘れてしまったのです。予定がキャンセルになった分、好きなだけ小説を書けるのに、です。世の中の動きに心がざわざわしながら、小説もなんだかうまくいかない…そうしたことが重なって、内面で四苦八苦しました。

### —時間がたつなかで、気持ちの変化のようなものはありますか？

今もまだ四苦八苦は続いていて、先が見えない不安はあります。それでも「自分はいままでをよしとして、ここからはNGとする」といった具合に、自分なりに考えて決めていかなければならないのだと、少しずつ分かってきました。新型コロナウイルスに関して、例えば



感染者数の推移を知ったところで、専門家ですら難しいのに私たちが状況を「見極める」というのは不可能です。だからこそ自分の頭で考え、自分なりの判断をしていくしかありません。私たちの社会は、実はそれがとても苦手です。自分の置かれた状況を自分で考えるって、簡単なようですごく難しいことだと改めて思います。

## 外出できない日々も、いつも通りを心掛ける

### —ステイホーム期間中、お仕事のほかはどう過ごされていましたか？

いつもなら、仕事以外はトイレでもお風呂でも、いつでもどこでも本を読んでいるのですが、ステイホーム期間中は本を読む速度もがくんと落ちました。本を開いても気持ちがふわふわして集中できず、中身が入ってこないのです。でも、できるだけ習慣はやめないでおこうと思い、料理をして、いつも通りの時間にごはんを食べるようにしていました。私が暮らす西荻窪ではすぐに多くの飲食店がテイクアウトを始めたと、それを買ってきたりもしました。難しい状況の中で小さな店が工夫し、住人も一緒に頑張るといった雰囲気を感じました。



### —角田さんはランニングをされるそうですが、それも続けていましたか？

はい、続けていました。走ることは12年前に始めましたが、本当はやりたくないんです（笑）。でも、走らないとサボってしまった気がして気持ち悪いので続けています。ただ、あの時期は走ることで沈みがちな気持ちを少し上げていたようにも思います。善福寺川を右に走れば緑地、左に走れば公園があり、とても気持ちいいんですよ。あとは、毎日韓国ドラマを見る時間も

良かったです。それまで一切見たことがなかったのですが、周囲があまりに勧めるので見てみたらすっかりハマりました。ストーリーが入り組んでいるのにしっかり作られていて、ジェンダー問題が慎重に扱われている点には新しさを感じました。人生を肯定している作品が多く、私自身がそこに救われていたのもあるかもしれません。見ている数時間は何も考えずいられて、そういった逃避する時間がやはり必要だったのだと思います。

## 変わってゆく世界でも、子どもたちはきっと大丈夫

### —このコロナ禍は、文学の世界にも影響を与えていると思いますか？

これまでも社会を動かす大きな出来事は、私自身の小説を含めて、少なからず影響を与えてきました。例えば平成7年に阪神・淡路大震災があり、地下鉄サリン事件があった。フィクションに求められるもの、読書の価値観というものが、この年を境に間違いなく変化したと言われていました。私がデビューした平成2年には、「分かりやすさ」や「共感」なんて



ものはまったく求められなかったけれど、明らかに平成7年以降は小説に分かりやすさを求める声が増えました。ですからこのコロナ禍も、今すぐには実感がなくても、社会全体をゆっくりと動かし、世界的な規模で小説も変わっていくのではないかと思います。

### —角田さんはコロナ禍で本が読みづらくなったとおっしゃいましたが、閉塞感の中で小説に救われた人もいないのでしょうか？

そうですね、読めなくなるか読みたくなるか、どちらかに分かれたかもしれませんね。私は東日本大震災の直後から約6年間、仕事を通して被災地と関わりましたが、震災直後は特に「小説なんて何の役にも立たない」と無力感が強かったです。それでも、関わり続けていく中で少しずつ、本によって助けられることもあると知り、フィクションは命綱にはならないけれど、人に寄り添うこともできると学びました。何もできないわけではないのかもしれない、と。ただ、こうした今のような状況に直面すると、やはり小説の力って何なのだろうと考え、相変わらず無力感も感じます。

### —今回の広報紙は区内の小中学校でも配布されます。角田さんの子ども時代のことを教えてください。

小学生の頃はふざけていて授業を真面目に受けず、よく教室の外に出されていた。幼い頃から本を読むのが好きなのは今も変わりません。小学2年生の時に「作家になろう」と決めて、作家になるのだから必要ないと、国語以外の教科書を放棄してしまったのですが、それはいまだに後悔しています。算数も理科も全て小説に関係していますので。無駄なことは何ひとつないよと、子どもたちには伝えたいですね（笑）。そして、もし作家になりたいという子がいるのなら、とにかくたくさん、いろんな種類の本を読んでみてください。

### —最後に、コロナ禍を生きる子どもたちへ、メッセージをお願いします。

今、いろんなことが制限され、好きなことは思いきりできないし、子どもたちにとっても大変な状況だと思います。でも、この「今まで」が通用しない状況は、「今まで」の時間が私たち大人よりも短いぶん、子どもたちのほうが受け入れやすいのかもしれない、とも思います。世の中が変わってゆくなかでも、きっと子どもたちには順応していく力があります。このトンネルの先に、そして今トンネルにいる中でも、楽しいことはあるよと信じて頑張ってください。

YouTubeで配信中!

紙面には掲載しきれなかった取材のこぼれ話も動画で紹介しています。

すぎなみピト MOVIE

すぎなみピト「角田光代さん」のインタビューが動画でも楽しめます。右2次元コードからご覧いただけます。

杉並区公式チャンネル